

## 日本・ニュージーランド合同シンポジウムの概要

内 藤 健 司\*

### 1. はじめに

今回の合同シンポジウムはロトルア(北島)のニュージーランド林業試験場(NZ. FRI)を主会場とし、1988年10月3日から5日にかけて林業統計研究会とNZ. FRIの共催という形で行われた。シンポジウムの目的は大きく分けて三つあり、お互いの研究情報交換、人の交流、及び両国の林業現状の相互理解であった。今回のシンポジウムの企画・準備等については、木平氏(信大)とバーク氏(FRI)を各々の窓口として行われたが、非常に気配りの行き届いた運営で一同楽しく有意義な一時を過ごせた。誌面をお借りして両氏並びに関係者一同に対して心からの感謝の意を表したい。

シンポジウム参加者は双方合わせて50名程で親睦と研究交流を深めるには程よい規模であった。日本からは同伴婦人2名を含めて合計17名の参加者があり、折りからの組織改編のため国立林試(現:森林総合研究所)からの参加者がいなかったのは残念であったが、赤井氏(京大)、諸戸、春田氏(東大)、嘉戸氏(富山県林試)等の普段あまり顔を会わす機会の少ない造林・土壌関係の会員が参加した事、石橋、露木、平田氏等(東大)の大学院の若手会員(New Crop)が参加した事、大学関係者以外は嘉戸氏一人だけであった事が日本側参加者の特徴であった。一方ニュージーランド(NZ)側参加者の特徴はFRI10名、民間企業10名、林業省4名、林業公社5名、大学1名という構成から知れるように、研究所(大学)・行政府・民間企業からまんべんなく参加していた事であり、NZに於ける三者の普段の協力関係を如実に示しているようだ。

シンポジウムのプログラム構成は第一部:開会の挨拶、第二部:一般林業情況、第三部:森林計画手法の三部から成り、日本側とNZ側から各々代表が出て講演を行う形式をとった。発表会場は木質材料を豊富に使った会議室「ライムの間」で扇形に椅子が並べられ、正面演壇にはオーバーヘッドプロジェクター、ホワイトボード、スクリーン等の設備が完備し、リモコンで部屋の照明やスライドの操作が出来るようになっていた。

### 2. シンポジウム講演発表について

初日の3日午前9:30より第一部が開始され、NZ. FRIのロトルア試験場長、キニンモンス氏と木平氏が歓迎と開会の簡単な挨拶を行った。引き続いて第二部が緊張した雰囲気の中で始まり、

---

\*宇都宮大学農学部

箕輪氏(東大)の座長のもとに日本側の講演が初めに行われ、内藤氏(宇大)が「林業統計研究会の研究活動の歩み」について、南雲氏(東大)が「第二次大戦後の日本林業の発展」について、赤井氏が「日本の森林と造林・保育施業」について、木平氏が「日本の木材利用の最近の動向」について講演を行った。日本側の発表に引き続きパーク氏の座長のもとにNZ側の講演が開始され、四年前東京でのユフロ国際研究集会に参加したゴールドディング氏(FRI)が研究者の立場から過去の歩みを振り返り、「研究目標に対する社会的要請、それに対する研究活動と成果及び林業技術化と現場への応用」について、リー氏(林業省)が行政側の立場から「最近のNZ林業界における変化とその意味するもの」について講演を行い第二部が終了した。当初の予定では第二部においてマッケウイン氏(林業公社)が民間企業の立場から「NZの森林資源、経営管理及び政策」について講演をする予定であったが、突然の出張のため翌日のトップ講演者、内藤氏と講演時間を交換することになった。

引き続き第三部が開始され田中氏(三重大)の座長のもとに日本側の講演が始まったが、前述の理由により内藤氏が「成長モデルにおける基本的成長関数」について割り込み講演を行った。続いて長嶋氏(名大)が「樹幹形モデルの性質」について、末田氏(名大)が「コンピュータを用いた小規模林家向けの森林調査システム」について講演を行い初日の講演発表が終了した。最後にキニンモンス氏が初日の講演について総括(Summing up)を行い、成長モデルに関してはテネット氏(FRI)が補足総括を行った。その後NZ側の主催で簡単なパーティーがFRIのロビーで行われ、初対面の双方の参加者が緊張を解きほぐし親睦を深めることができた。

翌4日の二日目は午前9:00より再会され、初めに出張から帰ったマッケウイン氏が前述のテーマで割り込み講演を行い、続いて第三部日本側の講演の続きが末田氏の座長のもとに行われ、箕輪氏が「超短伐期施業試験林の測定結果と競争・密度効果」について、露木氏が「パソコンを用いた林業向けリモセン解析システム:FREDAM」について、田中氏が「同齢単純林における直径分布の予測」について講演発表を行った。引き続き座長を田中氏に交代して、諸戸氏が「瀬戸地方における裸地再造林と土壌改良」について、嘉戸氏が「スギの雪害」について、甲斐氏(宮崎大)が「コナラ林の種子生産」についての講演発表を行って日本側の発表はすべて終了した。

引き続き第三部NZ側の講演発表は日本側に顔なじみのホワイト氏(カンタベリー大)の座長のもとに行われ、四年前のユフロ国際研究集会に参加したガルシア氏(FRI)が「成長モデルの作成手法と応用」について、マンレー氏(FRI)が「モデルによる森林計画手法の実際とその評価」について、ブラウン氏(林業公社)が「ラジアータ松人工林の施業と経営戦略(方針)」について、キャッツ氏(FRI)が「環太平洋諸国における木材需給の予測と木材貿易」について講演発表を行って双方全ての報告が終了した。ゴールドディング氏が二日目の講演全体についての総括を行った後木平氏が日本林業に関する統計情報の入手方法について簡単な説明を行い、林業統計研究会を代表して南雲会長がシンポジウムを終えるにあたり感謝の挨拶を行ったが、最後に南雲会長が壇上からキニンモンス氏の席に歩み寄り満面に笑みをたたえて力強く握手を交わした折りには双方の

参加者から大きな拍手が湧きおこった。

夕方には付近のホテル、クウォリティーインの一室にて日本側主催による簡単なパーティーが開催され、双方の参加者がシンポジウム報告の話題をこえた幅広い情報交換を行うなど一層の親睦が深められた。宿舎のモーテルに帰った後日本側参加者一同は木平夫妻の部屋にて、木平・赤井両夫人の手料理になる野菜料理やピフテキを肴に3リットル入りのボックスワインを開けて祝杯をあげ、普段は真面目そうに見える諸先生の余りお目にかかれない側面を発見したりしながら深夜に至るまで楽しい時を過ごした。

### 3. フィールド・トリップについて

三日目の5日は午前8:30から林業地見学に出かけ、午前中は「Timberlands」(林業会社の現業部門)のBay of Plenty地区にあるカインガロアフォレストを、ピーターソン氏とカーター氏(Timberlands)の説明で見学した。ラジアータ松の造林・保育施業と伐採・搬出作業を中心に説明を受けたが、話に聞いていたラジアータ松の成長ぶりやその労働コストと一面に広がる平地林を目の前にして一同改めて驚きの念を禁じ得なかった。FRIで昼食後近くのチキテレ試験地にて羊の放牧を林間で行う(牧場の中にラジアータを植え込むと言ったほうが現実に近い)複合林業の試験林をノーエル氏(FRI)の説明で見学した。ヘクタール当り50本から400本までの植栽密度の試験林があったが、林齢15年で大人の肩幅より太く成長した胸高直径や樹間に広がる緑濃いなだらかな牧草地(50本植栽)は、日本における林間放牧とは全く異質のものを感じさせた。夜は近くのインターナショナルホテルで先住民マオリ族の踊りと料理を、京都大学に留学した経験のある柔道初段のテネント氏の案内で楽しんだ。

### 4. おわりに

以上でシンポジウムの公式日程はすべて終了したわけであるが、講演発表の詳しい内容については後日印刷公刊されるプロシーディングスを参照してもらい、その後の行動について簡単に報告する。翌6日は午前中FRIの研究室を訪問し各々の専門分野の研究者と研究交流を行い、午後希望者はロトルア市街の観光も楽しみ、夕食はキニンモンズ氏の招待で中華料理をご馳走になった。更に、7日には空路南島のクライストチャーチへ移動してホワイト先生のお世話でカンタベリー大学の林学部を見学し、大学院の学生や地元の林業協会の人たちと懇談会をもった。また翌8日は土曜日(週末は休み)にもかかわらずTimberlandsのウォッシュボーン氏らの説明で北島の森林とは違った丘陵地帯にあるアシュレイフォレストを見学した。夜は全員がホワイト先生の自宅でのバーベキューパーティーに招かれた。9日は朝から自由行動でイギリス以外で最もイギリスらしいと言われる早春のクライストチャーチの市街を散歩し、オーストラリアに向かう木平・赤井両ご夫妻と別れ、夕方オークランドまで空路移動して翌日帰国の途についたが、ここに紹介したロトルアでのシンポジウム以外の見聞・余談については、林業統計研究会誌にいずれ

他の参加者が投稿してくれる事を期待しつつ筆を置くことにする。